

紙の豆知識

山梨大学 教授 宮澤 正明

教科書四年「筆・紙・すみ・すずりができるまで」(P 24・25)では、毛筆用具の原料や作る工程を紹介しています。今回は、「書く」という行為にとつてなくてはならない「紙」を、歴史や特徴といった切り口から眺めてみたいと思います。

1 紙の始まり

紙は、中国で発明されました。前漢の時代(紀元前一七〇年〜紀元頃)の遺跡から、麻を原料とした紙の断片が発見されています。はつきりしたところでは、西暦一〇五年、宮廷の調度や器物をつかさどる長官であった蔡倫という人が、樹皮、麻の切れ端、麻布のぼろ、魚網を用いて紙を作り、皇帝に献上したという記録が、『後漢書』に残されています。

蔡倫の頃より前の紙は、表面があまり平滑ではなく、文字を書くためには使いづらいものであったと考えられています。

蔡倫は、製紙法を改良し、文字を書くものとしての紙の製法を確立した功労者であるといわれています。

日本へは、西暦六〇一年、高句麗の僧である曇徴によって製紙法が伝えられ、大化の改新以降、戸籍の作成や經典の書写に、紙が大量に使われるようになりました。

いっぽう、ヨーロッパでは、長く羊皮紙が使われていました。羊の皮を原料とする羊皮紙は、作るのに手間がかかり、高価ではあるものの、丈夫で書きやすく、表裏に書くことができるため、優れた書写用材とされていました。

ヨーロッパ大陸に製紙技術が伝わった

ど求められませんでした。紙は、筆記具と深く関わりながら変化を上げてきたのだといえます。

筆記具に合った紙でないと、使いにくいだね。



2 和紙ってどんな紙?

日本に伝わった製紙法は、さまざまに改良された後、今日の手すき和紙の製法の基礎となる技法が、平安中期以降に広く普及しました。この技法により、薄くても軽くて長持ちするという和紙の特質が生まれたのだといえます。

原料としては、奈良時代の初めまでは麻が、やがてコウゾが主体となり、奈良時代の終わり頃にはガンピが加わり、そして江戸時代にはミツマタが用いられるようになりました。

明治初期、ヨーロッパやアメリカから、機械すきの製紙法が日本に導入されました。一般に、この製法で作られた紙は洋紙と呼ばれます。洋紙は機械によって大量生産ができるうえ、インクを使った印

紙についてもっと知りたいときは…

東京都北区にある「紙の博物館」は、紙に関する資料を幅広く収集・保存・展示する、世界有数の紙の総合博物館です。

受付で希望すれば、解説ボランティアの方が、紙の作り方や歴史について丁寧に説明してくれます。館内には、専門図書室も設けられており、紙に興味をもったなら、まずは訪れたい場所といえそうです。



公益財団法人 紙の博物館

- 入館料: 大人 300円 (240円)
小中高生 100円 (80円)
※ ()は20人以上の団体料金
- 開館時間: 10:00 ~ 17:00 (入館は16:30まで)
- 休館日: 月曜日・祝日の翌日・年末年始
- 電話: 03-3916-2320
- アクセス: JR王子駅南口から徒歩約5分
- HP: <http://www.papermuseum.jp>



く残っているからです。手すき和紙は、現在、全国各地で作られています。近年、アートや文化財修復などの用途で注目を浴びている和紙は、海外からの需要も高く、日本のみならず世界の文化にとつても、なくてはならないものになりつつあります。

- 【参考文献】
- ・紙のなんでも小事典(紙の博物館編/講談社)
- ・紙の文化誌(小宮英俊/丸善)
- ・「トコト」やさしい紙の本(小宮英俊/日刊工業新聞社)
- ・紙の科学(半田伸一監修・紙の機能研究会編著/日刊工業新聞社)

毎日使っているものだけど、紙のことって知らないね。



ピッチャー

紙のこと、知りたいな。



ペンちゃん

イラスト: 荒井良二